

2019年6月30日(日)

老球の細道490号

## 6月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今月は目標の「通信6号発行」、そして「血圧120/70」の二つを達成した。何歳になっても自分で立てた「ちょっと厳しいかな？」という目標を成し遂げることは嬉しいものである。2019年もちょうど半年が過ぎた。新年に立てた目標、スローガン「ちょっとずつ(猪突)猛進」をもう一度読み直して軌道修正を図らなければならない。やり直しのきかない「明日はない」年代になっている。紫のアジサイを眺めながらふと思う。

### 1・何気ない日常から

#### ◆「1歩前へ その積極性が 人生を変える」〈ある斎場の男子トイレの張り紙から〉

講習会において常に講師の前に出てきて説明を聞く子どもは必ず上達する。若いうちは出過ぎた杭に。爺様は1歩後ろへと思うが、前かがみになってしまい腰痛が改善しない。

### 2・読書から

◆「選ばれた人とは、自らに多くを求める人であり、凡俗なる人とは、自らに何も求めず、自分の現在に満足し、自分に何の不満を持っていない人」〈オルテガ著『大衆の反逆』ちくま学芸文庫〉:「満足した豚よりも不満足な人間の方が良い」とJ・S・ミルも言っていたが、わが身が凡俗なるがゆえに、その気になればまだまだ伸びるのではないかと錯覚している。その気持ちが薄れた時爺様のアクティブ人生は終止符を打つ。

◆「最も暗き時が最も暁に近い時」〈清沢冽著『暗黒日記』岩波文庫〉:プロイセンのフリードリッヒ大王の言葉である。太平洋戦争時に敗戦が濃くなった時軍隊が盛んに使ったという。どん底に陥った時自分を励ます。私は最も暗き時が最もトイレに近い時。

◆「選手が体調を自己管理しなければならないように、指導者はしっかりと感情を制御しなくてははいけません」〈『コーチングクリニック』ベースボールマガジン社〉

コーチはコートにプライベートを持ち込んではいけない。夫婦喧嘩をしても、親子喧嘩をしても、仕事で失敗してもコートに立つときは仮面ライダー「ヘーンシン!」。顔はスマイル、言葉は褒め殺しの連発、心はマグマ大使。

### 3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「褒めて褒められて何になるか、一刻を惜しんで勉強せよ」〈朝日・折々のことば・櫻井正一郎〉:京都大学には出版記念会をしない伝統があるらしい。研鑽は馴れ合いの中ではできないという学者の矜持がある。ほめられる、賞賛されることで満足した時点で自分の伸びはストップ。学者の飽くなき探求心にコーチも負けられない。満足はビール後のみ。

◆「強い男とは、自分の強さをあからさまに見せない男。少年の頃の信条を貫く人」〈朝日・ジョルジョ・アルマーニ〉: NBAの伝説のコーチ・パット・ライリーは「アルマーニ」のスーツを身につけてコートに立っていた。恰好よくて真似しようと思ったが高価で手が届かなかったので自称「アルマーニ3」で自分を納得させた。常に恰好よくありたい。

◆「一見眉間にシワが寄ったりムツとするような言葉こそ、実は自分を助けるフレーズになるかもしれない」〈朝日・折々のことば・壇密〉: バレーボールの名門古川商業の監督は自分を育ててくれた3人の恩人の内1人に、意地悪やきつい言葉を浴びせられたかつての上司をあげている。おかげで自分自身を奮起させる原動力になったと。